

# きざりのきざり

NO.27 月刊

昭和三十五年九月一日発行 (非売品)  
発行所 岡山県都窪郡吉備町夜瀬七〇七 宇垣方  
吉備 靱 老 協会

## ○会津の戦 (その二)

会津藩主二十三方石松平肥后守岩深(五たもり)は京都の守護職を勤仕し、徳川将軍とは最も深い姻戚関係にあったので、最後まで賊軍の汚名のもとに奥州の諸藩仙台、荏内、南部、二本松、中村、三春、弘前、榎倉、新庄、山形、上山、磐城、平、一関、福島、本庄、宇山、原、亀田などの二十余の藩に撥して(秋田津軽は應じなかつた)官軍に抗した。既後の諸藩も亦多くこれに呼應したりでその勢は盛んなものであった。そこで朝廷は仁和寺宮を東征総督に任じ、薩摩の大山格之助(後々の歳で日露戦争の時は満州軍総指揮官となつた)伊地知正治、長州の山縣狂介(後々の有朋で明治時代の元老となつた)お位の板垣退助(征韓論に破れ、辞職し、後々自由党をつくり大隈重信と共に内閣を組織した。そして自由民権を叫んだ有名な政治家である)等を参謀として薩長土佐大垣大村などの藩兵を率いて、既後方面と磐城方面の二手にわけて進撃した。当面の敵軍を掃蕩し、ついで既後口と白河口の二方面より会津に迫り、鶴ヶ城の堅塁に向つて包圍攻撃を加へたのである。

会津藩は反旗の主謀者にして、頑強に抵抗し、五十歳以上のものは玄武隊と稱し、三十六歳から四十九歳までは青龍隊、十八歳から三十五歳までは朱雀隊を編成して守備を嚴にされた。十七歳以下の少年三十人、七人は白虎隊を組んで城外の瀧沢村に本營を置き、別に兩人や農民やう募つた奇勝隊や敢死隊も加はり、又婦人や娘子軍を興し、鎗刀を揮つて砲彈雨飛の間に立廻り、城兵は死力を盡して善戦したが官軍は十万余、守兵は僅かに五千數百に過ぎず、それに盟約した奥州の諸藩は支援はなく悪戦苦闘

旬日に亘る激戦に漸々戦線は縮められ、市街地は砲火によつて火災を起し、修羅の巷と化し、一家悉く自殺するものさえあり、死屍は城郭の外に横たはり、惨状は目もあてられな、志景であった。時に明治初年八月廿三日、残る白虎隊の少年十九名は瀧沢村の守備を退いて、飯盛山に登り、大砲に包まれて落城に迫る天主閣を仰ぎながら潔く自決したことはあまりにも有名な話である。

ここに至つて藩主松平容保父子は官軍に降り、ついで仙台、南部、荏内の諸藩も相結いて帰順し、奥州は全く平定したのである。この戦で特筆大書したいことは封建時代の最後を飾つた少年白虎隊の壮挙である。その壮挙が現代の思想から考へてよい、悪むいふは別問題として、主君のため生命を賭して飯盛山に散華したことは幕末史上に老朽を放つたといへよう。

飯盛山の中腹に少年たちを葬る墓碑が併んでい。訪ふものはこの可憐紅顔の少年が夫つき、双折れて悲壯な最期を選んだ、ほど遠からぬ明治政変の歴史を回顧し、誰れも涙をなくして立ち去ることが出来ようか。瑞籬を繞らした左右の石柱には

「精忠貫日月 勁節凌風霜」の十字が精潔な筆跡で刻みつけてある。

## ○会津の戦

豫て官軍に不服従の態度を示して、いた幕府の海軍奉行榎本武揚は西御、勝西巨頭の見によつて和議が成立したことをいたく憤慨し、幕府の軍艦八艘に部下數百名を乗船せしめて脱走し、品川湾から会津藩の應援のため仙台湾に入り、陸前の松島に停泊した。偶会津若松城陥落の報を聞き解纜して、金峯山沖を北上して北海道の函館に走り、大島圭介等の逃走兵と合同志二千五百余名、五稜廓を占據して官軍を逆へ撃つた。時に明治二

(四)

年五月十一日一万余の陸海官軍の總攻撃を受け壊滅した。  
 (榎本武揚は幕府の臣で幕命によつてオランダに留学した。帰つてから海軍奉行となり官軍に叛いて亟館の戦で破れ降伏。明治政府に登用せられた。海軍中將に進み、後チロシヤ公使となつて千島と樺太を交換する條約を結んだ人である。ついで農商務、外務などの大臣を勤め明治四十一年、七十三歳で歿した。)



△ 太田家の墓塚は八幡山の共同墓地にある。

- 一、 栄岳院道繁信士 文化十四年五月廿五日 太田傳四郎相家墓
- 二、 峯恩院妙意信士 寛政四十年十月四日 享年三十六 同人妻 現名 婦氣墓
- 三、 青巖院宗雲信士 天保十三年庚午七月廿九日 享年七十六 太田傳四郎宗結墓 (相法ともあり)
- 四、 妙躰院寿玄信士 天保第二十年正月十二日 享年五十八 同人妻 現名 勳墓
- 五、 龍雲院宗讚信士 天保九年六月十四日 歿行年四十七歳 現名 太田政吉相良墓
- 六、 純淵院讚妙信士 安政六年六月晦日 歿行年六十六 同人妻 現名 阿幾
- 七、 徳芳院玄泰居士 明治四年十二月十七日 歿享年六十
- 八、 清涼院宣泉大姉 安政三丙辰年六月廿四日 歿 同人妻
- 九、 清岳院良直居士 作州倉舖多賀現右衛門利方妹 現名 塩 享年四十二歳 歿 明治十八年酉六月廿九日 再五十五歳

- 一、 清操院妙香大姉 都窪郡帶江村滝浪坂大夫三女 鹿野大正五年三月三日 歿行年八十一歳 太田傳四郎相清墓
- 二、 玉艶院妙粧大姉 太田元四郎相讓娘 俗稱義志也 入嫁帶江加須山陶浪保太妻 享享年十六 不幸而早逝也 本墓在岡所分 曾此葬之 安政五年九月晦日 歿 五十七
- 三、 眞証院常老居士 太田傳四郎長男 康兵衛和六年九月二十日 卒 享年 五十七 (妻は伊子、右島県芦品郡府中町安原清三郎の二女、昭和六年十月十日 歿 享年四十歳 あり)
- 四、 全大院泰如居士 昭和三年庚午十月九日 歿 太田始四郎 貞心院全道大姉 後配 手代木氏元枝女 君俗太田始四郎 幼名未吉、安政五年戊申八月五日生 滿中國吉備郡川辺村 日教次敬次男、少為侍四郎 翁養嗣子、配八千代、拳宗次郎、女三志近後娶、金津藩士手代木勝任長女元枝、生二男四女、長徳次、次収、資性、謙和、素樸、御氏推服、敬次、拳町長、有功、勞、崇子、相善、即能二子、皆卒、帝國大學、從業、精勵、世人自後、采之秀、昭和二年戊辰十月九日、以痲終于家、享 年七十有一、葬于萬年山、祐林寺中、先塋之次、親友、幻庵野崎、廣太、誌 九、 紹老院秀英居士 明治三十八年五月十日 歿 太田始四郎長男 宗次郎 二十 八歳 (過去帳は四月十四日とあり)
- 五、 寂光院智定大姉 明治十五年五月廿日 歿 太田傳四郎相清娘 同苗始 四郎妻 現名 八千代 享年二十四歳 歿
- 六、 諦観院機峯道先居士 俗名 太田 收 昭和十三年五月廿八日 歿 享年四十九 東京市 雑波一ノ三女 太田收妻 弘子 分骨
- 七、 清岳院貞屋妙弘大姉 大正九年二月一日 歿

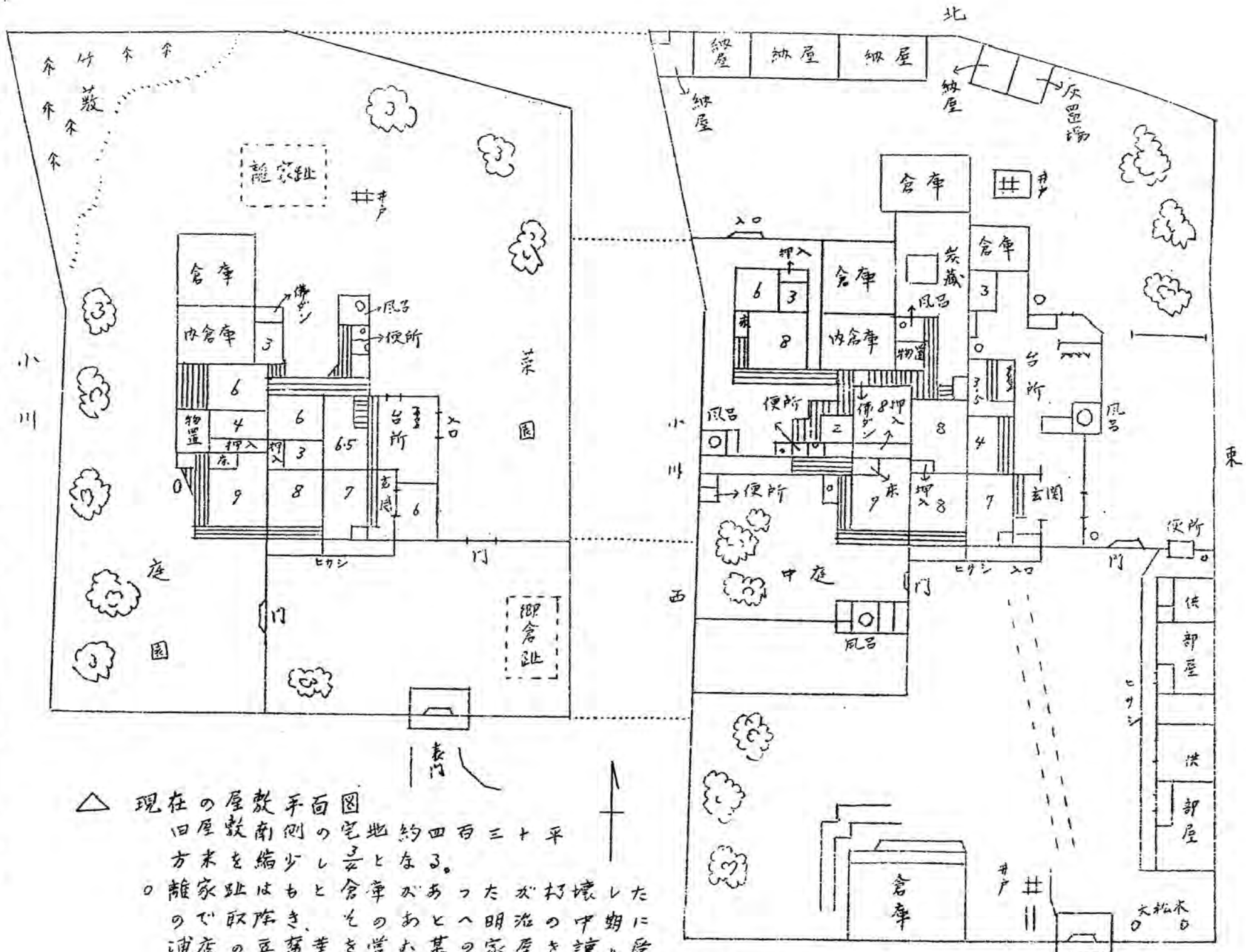




天保以前の平面図の下部に「父 辛酉 庚辰」と書いてある。「父 辛酉」は慶應元年十月十二日六十五歳で歿した大飼清原の生れ歳の享和元年である。清原は倉敷邑の吉田義右衛門の男に生れて大飼近介の養嗣である。又「父 庚辰」とあるは明治元年八月二日四十九歳でなく生れた大飼水菫の生れた文政三年に當る。この図は清原が四十歳前後水菫が二十歳前後の時に書いた家相図と思はれる。水菫の祖父を近介といふ。近介には実子の建藏(号は止亭)がありこの人は文政六年二月八日二十八歳、即ち水菫が四歳の時にこの世を去つてゐるので實は建藏の子ではあるまいか、清原の妻になつてゐる操延は初め建藏の妻であつたが二十歳で實は建藏の若さで寡婦になつたので一ツ歳上の清原を再結ばし迎へたものと思はれる。つまり清原は水菫(名は多清)の義父に當る認識である。

(御倉というは江戸末期に天災地変の際、村民の飢荒を救恤する目的で各村に建つたものである。手澤農民から穀物を賑出せしめて貯蔵して置き、凶荒に備へるための政策を執つたものである。この制度は古代からあつて名を義倉ともいひ、折々に設けられて備荒貯蓄の方途が講ぜられたのである。これを荒政といひ、おる。

大養家にあつた御倉は供部屋のあとに建てられたもので天保年間の図面にならぬので天保以後に管轄してゐた村落の飢饉に備へて建築されたことは明かである。



△ 現在の屋敷の面積は約四百三十坪である。この面積は、天保以前に建てられたもので、その面積は約四百三十坪である。この面積は、天保以前に建てられたもので、その面積は約四百三十坪である。

△ 天保以前の養父の平面図(写) 縮尺 6尺(1.8m)当5粒

△ 天保以前の養父の平面図(写) 縮尺 6尺(1.8m)当5粒



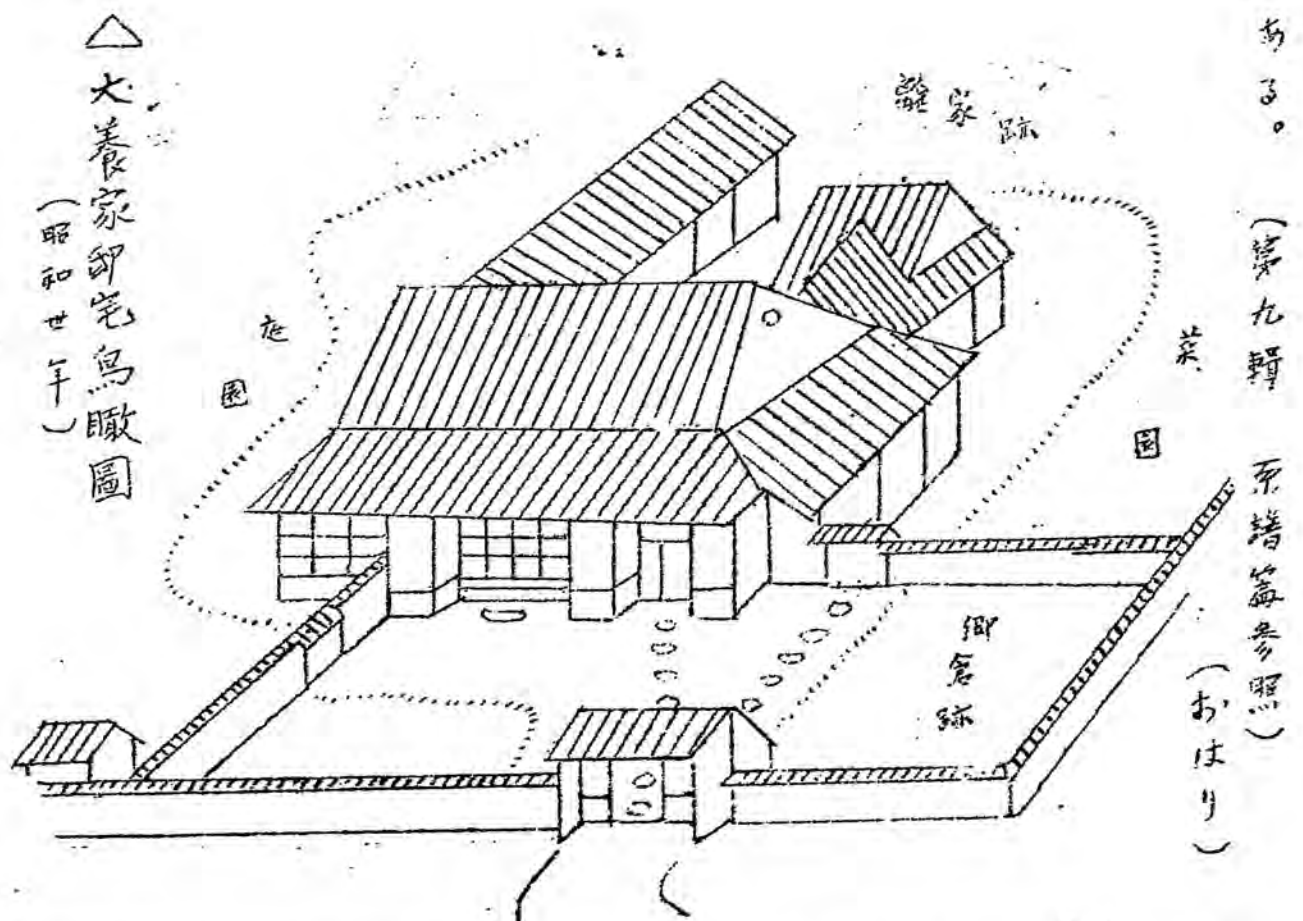
川入の旧邸宅は百畝番地にして、今尚藩政時代のまゝの姿を保つてい  
るが、内部を部分的に改造し或は御倉なども取毀されている。御土の文  
化跡として何等かの維持方法によつて永久に原形を保存すべきものと考  
へられた。

邸宅の東北百畝ほどの處に大養家若祖累代の墓地がある。石門を入る  
と右側に昭和十一年十月に建設した「故内閣総理大臣大養公之碑」とし  
た大石碑がある。撰文は松平康國、書は宮島大八の筆である。その北  
に面して数十基の墳墓が整然と列んでいる。

△ 川入の後山に昔陶器を掘えて陶器を製造した八幡焼の竈跡がある。明  
治の初年頃までその竈跡が存してゐたが次第に取毀されてしまつた。数  
年前には草叢から陶器の破片を発掘したこともあつたといふが、いまは  
全く跡形もなく崩れ去つてその所在さえも知る人は稀れである。

この陶器製造は水庄が安政六年(三三九)一元治元年(三五四)頃に家政園窮  
のため棟回策として有志者数名と謀り、陶器製作を志し肥前国伊万里  
の経験ある陶工を招いて創始したと傳へられている。陶土の大半は池  
ら供給を受け、附近より出土する黄色の陶泥をこれに混合して焼きせ  
らに釉薬を施したもので製品は日常生活用する茶碗、皿などの普通の種類に  
して特殊性はなく、ただ地方向のものであつた。数年間続けられたが  
営方法に不馴な結果費用が嵩み採算がとれなくなつた。偶明治元年に水  
庄は病氣に罹り四十九歳でなくなつてから他のものも引きつりに中  
止した。製品は日用品を主としてゐるだけに現在残存するものは稀れ  
である。ただ川入の六五番地高木照夫の宅に当時のものが遺品として保存  
されてゐる。これは蓋付茶碗が十六個揃あり總体に部厚く無地は薄青色  
を帯び、表面は紺青色にて物の模様を細線で描いた雅味に富んだ陶器

である。(第九輯 系譜篇参照) (おほり)



△大養家邸宅鳥瞰圖  
(昭和七年)

花苧織機・蘭草撥機製造  
農機具販売・修理

# 平田鉄工部営業所

都窪郡吉備町撫川国道筋  
電話吉備六三番

## 都窪郡吉備町庭瀬二九一

# 吉備木工有限会社

電話(吉備局) 一二七番  
一五四番